温泉山の繁栄と衰退

山岳信仰の雲仙岳は、古来から温泉山と表記して「うんぜんざん」と呼ばれ、十六世紀中頃までは、肥前国を代表する修験道の霊山でした。

祖霊を祀り、五穀豊穣を祈り、雨乞いを祈願し、地震鎮静を祈る信仰の山として温泉神が祀られていました。

八世紀初めの「肥前国風土記」の記録では、「峯湯泉」(みねのゆのいずみ)と記され、当時の地獄の様子を知ることができます。

また、景行天皇巡行の条には、雲仙岳(温泉山)には、高木津座(たかくつら)という「山の神」の記録があり、温泉神社が創建された年代については、後世の記録「歴代鎮西要略」等に「大宝元年辛丑、肥州高來郡温泉神垂跡」とあることから、今から千二百十数年前の701(大宝元)年に鎮座されたのが始まりだとされています。

その分身末社として、山田神(現　吾妻町温泉神社)、有江神(現　有家町温泉神社)、千千石神(現　千々石温泉神社)、伊佐早神(現　諫早市諫早神社)の四ヶ所が勧請され、現在は「温泉四面神社」と標記され地元では「お四面さん」と親しみを込め呼ばれています。そして温泉四面神は、一身四面の姿で表現される筑紫島(今の九州)の、古事記にみられる「一身四面」の神に対応するものです。

雲仙の温泉四面宮を奉祀していたのは温泉山満明寺の仏僧でした。古記録(温泉山縁起書)によると701(大宝元)年行基菩薩が仏法紹隆の大願を起こし、堂塔伽藍を建立したい旨を文武天皇に申し上げると免田の寄附をして下さり、山号を温泉山、寺号を満明寺とされました。さらに、四面

温泉神社

大菩薩(現温泉神社)を勧請して当山の鎮守としています。

千々石から雲仙への登山道途中には女人堂跡があり、高野山と同じく雲仙は古くから女人禁制の霊山でした。

光孝天皇～朱雀天皇(884～946)の時代には、塔堂伽藍が焼失しましたが、1115(承久三)年に定僧上人により再興されました。

温泉山満明寺は、修験道の中心的存在であり、現在も島原半島一円に寺跡と称する場所や寺名の付く大字、小字が数多く残っており、温泉山満明寺の末寺や分院であったものが多く見られます。

1563(永禄六)年に来日したポルトガルのイエズス会宣教師のフロイスの著「日本史」によると「　　この硫黄泉に近く、かの山の上には大いなる僧院があるが、そこには実に大勢の仏僧がおり、肥前国全体で、はなはだ多額の収入を有している。ここは日本における最大、かつもっとも一般的な霊場の一つで、不断に巡礼が訪れている。」と記録があり、当時の温泉山の繁栄を物語っています。

しかし、歴史は流れ1580(天正八)年に当時の有馬地域の領主であった有馬晴信は、保身のためキリシタン大名となり、領内の

雲仙古図

寺社破壊を決行しました。

キリシタン宣教師にとって、山伏（修験道）は「直接悪魔に奉仕する魔術師であり、残虐な詐欺師である。」「直接悪魔祀り、七日間高山に在り食を断ち、悪魔を見るまで難業苦行をなせり」と酷評して、対立や争いがありました。

フロイスの日本史には「巡察使が滞在した３ヶ月の間に、大小合わせて四十を超える神仏の寺社が、ことごとく破壊された。それらの中には日本中で著名な、きわめて美しい幾つかの寺院が含まれていた。」と記録があり、その主たる寺社は雲仙の山岳寺院でした。温泉山は、明治期を待たず、壊滅的な排仏毀釈を受けた地域でした。

この破壊惨状は、雲仙寺社の再興計画をした山岳信仰を奉じる薩摩島津氏の家老　上井覚兼日記（天正十二年）の温泉山登山の記録でも確認ができます。「温泉山一見に参り候。言語道断、殊勝の霊地、申しに及ばず候。悉く荒廃の躰、是非なく候。四面大菩薩、ようやく礎ばかり残り候。寺院の跡など見て候て、哀涙袖を濡らし候　」

その寺社破壊の影響は広まり、多くの仏像が隠してあった洞窟（加津佐の岩戸山）までもフロイス達は見つけ出し、後世へ残すべき貴重な仏像を全て焼却し薪にしました。（フロイス著「日本史」記載）

1637（寛永十四）年には、島原藩主の過酷な年貢と圧政によりに島原　天草一揆が起こり温泉山満明寺は、暴徒により全ての堂宇を焼失、破壊されました。

一揆に加わった、半島の南側の有馬　有家　口之津　加津佐などの村は廃村となりました。その翌年、島原藩は松倉城主に代わり遠州浜松から高力摂津守忠房公が城主に着任、その家臣善左衛門清輔の兄、弘宥法印（遠州浜松鴨江寺出）が1640（寛永十七）年「温泉山満明寺一乗院」として復興しました。

「深溝世紀」によると1680（延宝八）年には、寺宇の建立、さらに1693（元禄六）年には、温泉山四面神祠（現温泉神社）が改装され、一乗院は四面宮の祭主となっています。

江戸時代中期の温泉山一乗院の活動は、主に島原藩の祈願所として、藩主の病気平癒祈願や火山活動の鎮静祈願、雨乞いなど数多くの祈祷を行っていました。

また、江戸時代の温泉山は、多くの文人たちの参詣の記録があり、満明寺一乗院の僧が地獄の案内をしていました。

江戸時代中期の図入り百科事典「和漢三

釈迦大仏

才図会」では、全国の山岳地獄では筆頭に「肥前ノ温泉」と紹介され、雲仙地獄が満明寺一乗院により管理　支配されていることが記載され、日本山と記されています。

「往昔は大伽藍(だいがらん)あり、日本山（温泉山）大乗院満明密寺と号する。文武天皇の701(大宝元）年行基の建立。三千八百坊、塔は十九あったという。　　礎石あるいは石仏のみが残り、今はただ僅かに一ヶ寺と大仏があるのみである。」

1783（天保三）年「西遊雑記(さいゆうざっき)」古川古松軒(ふるかわこしょうけん)では「雲仙が嶽は高山にして、むかしは寺院三千坊有りて、今の高野山のごとく食地も多く、はんじやうせし郷地なりしに　　さて此山におゐては、湯の湧出る所かぎりもなく、それを地獄と称して、さまざまな名有り　　」

また、「西遊記(さいゆうき)」橘南谿(たちばなのなんけい)著　1795（寛政七）年では、「肥前国雲仙が嶽は西国の名山なり。甚だ見事なる名山也。　　唐船などの長崎へ渡るにも、大洋の中にて此雲仙が嶽を目当てとするとて、　　絶頂は平地にて民家そこそこに見え、田畑も多く、折しも稲、心よく実り　　向こうを見れば茅葺きの仏院みえて、此寺を一乗院という。天草の乱迄は寺も多く四十八院までありしが、賊徒此山に拠りしに依って、今は僅かに此一乗院ばかりこそ、むかしの俤を残せるとぞ。　　」

1875（明治八）年の「神社明細調帳」によると、島原半島には特有な「温泉神社」十八社の記載もあり、島原半島内の地名を見ると、寺名ではないですが、国見町片田名の「温泉田」や川原田名の「四面田」、愛野町愛津名の「四面平」、諫早の「四面橋」、小浜町の木場名の「四面谷」、北有馬町今福名、谷川名の「四面山」、という小字、さらに小浜町山畑名の「小笹」、瑞穂町の「夏峯名」「大峰」、雲仙の「吹越」は大峰山の行場名からだと考えられ、雲仙の「加持川」は真言宗の「加持祈祷(かじきとう)」からの名だと考えられ、修験の峯入りの伝承地名と考えられます。

参考文献
「和漢三才図絵14」寺島　良安著
㈱平凡社（東洋文庫510）
「東西遊記２」橘　南谿著
㈱平凡社（東洋文庫249）
「キリシタンと修験道」根井　浄著
㈱東京堂出版（S63. 5 20）
「山岳修験」第30号（H14. 12. 14）
島原半島特集　雲仙岳の歴史と文化　根井　浄　氏
「地獄の略縁起　山絵図を読み解く」根井　浄　氏
「温泉山縁起」温泉山一乗院開山1300年記念誌
発行　温泉山一乗院（H13. 11. 2）
「パークガイド雲仙」歴史編
発行：自然公園財団（H26. 8 1）

自然保護と国立公園

日本新八景記念パレード

禁制札

雲仙は、島原半島中心部に位置し、四季折々変化する素晴らしい自然景観とともに、国内屈指の火山景観を成す三岳五峰（普賢岳、妙見岳、国見岳、野岳、九千部岳、矢岳、高岩山、絹笠山）と国の天然記念物に指定された平成新山を有しています。

自然保護活動の歴史は古く、島原藩は、1693（元禄６　年　温泉山保護のため山番人をおき、番所入口には禁制札を立てました。1738（元文３）年には、普賢岳に殺生禁止の石札が建てられました。

さらに、1775（安永４）年には、温泉に山留役を置き、自然保護のため「諸殺生竹林伐採　ツツジ掘取　花折摂　野火等」の禁止礼を東西南北の入口に立てました。

また、雲仙は古くから国際的にも自然豊かな健全な温泉地として全国の先駆的な観光地でした。

1927（昭和２）年　大阪毎日新聞社、東京日々新聞両社共催による「日本新八景」のハガキ投票が行われ、温泉岳（雲仙岳）は山岳部門で１位に選出されました。翌1928（昭和３）年３月、温泉岳が史跡名勝天然記念物法により名勝地に、また普賢岳紅葉樹林、地獄地帯シロドウダン群落、池の原ミヤマキリシマ群落、原生沼沼野植物群落、野岳イヌツゲ群落が天然記念物に指定されました。

また、1930（昭和５）年７月に当時滞在していた外国人から雲仙の国立公園化への陳情書が寄せられ、雲仙を強く推薦する文面には発起人ほか56名の署名が添えられていました。

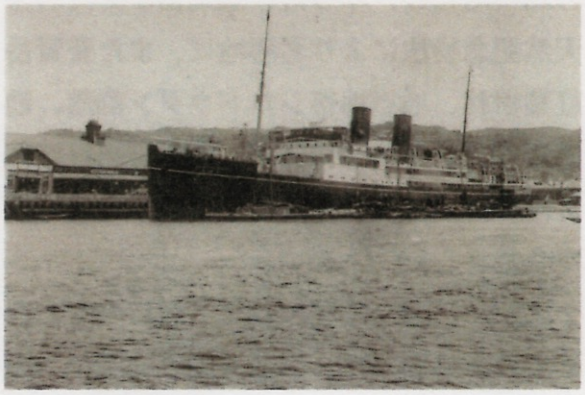
1931（昭和６）年には、日本帝国議会で国立公園法が可決され、内務省は選定調査会を立ち上げ、国立公園委員会も発足しました。

1932（昭和７）年、雲仙は国立公園候補地となり　他11カ所)、1934（昭和９　年に、瀬戸内海、霧島とともに日本初の国立公園に指定されました。国立公園指定に際し、それまでの「温泉岳」の表記は、「雲仙岳」に改められました。1956（昭和31）年には天草諸島の景勝地をあわせ、雲仙天草国立公園となりました。

外国人避暑地

雲仙に向かう外国人の行列

外国人のダンスパーティー



日本～中国間連絡船

浴衣でくつろぐ外国人

雲仙に外国人が登山するようになったのは、外国人登山の禁止令が解除となった明治になってからです。

長崎に滞在していた外国人が、陸路や、茂木から小浜まで海路で、そこから４人の男で担いだ籠「チェアカゴ」や馬、徒歩などで雲仙へ避暑に訪れていました。

1877（明治10）年頃から、雲仙は、避暑地を兼ねた温泉場、四季の遊楽郷、理想的な自然公園として西日本のパラダイスと賞賛され、外国人の登山が増加しました。

1889（明治22）年頃には、海外の新聞に避暑地　温泉地として雲仙が紹介され、上海、香港、ロシアなどから避暑客が増加し国際的に知られるようになってきました。そして、外国人のために旅館の外観を洋風に改装し、洋間や１人用の箱風呂も特別に用意されていました。また、当時、旅館の女将さんは英語やロシア語も話していたそうです。

1911（明治44）年には、県営公園となり県温泉公園事務所が開所され、雲仙の素晴らしい自然を利用し内外人を誘致するため、施設の充実が図られました。1912（明治45）年の統計では、外国人の利用数13,022人、日本人12,532人でした。

1913（大正２）年になると、県営雲仙ゴルフ場、県営雲仙テニスコートが開設、外国人避暑客のための雲仙娯楽館もオープンし、礼拝、舞踏会、映画会などが開催され、多くの外国人が雲仙での長期滞在を楽しんでいました。1918（大正７）年には、ジャパンツーリストビューロー（現在の日本交通公社　JTB）の夏期雲仙出張所が公園事務所内に開設され、雲仙の紹介宣伝、雲仙の開発に貢献していました。